

SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（シナリオ創出フェーズ）

令和3年度採択プロジェクト 事後評価報告書

2024年（令和6）年3月

研究開発プロジェクト名：ピアサポートのDX化による、新しい当事者参画医療社会モデルの構築に向けたシナリオの創出

研究代表者：北原 秀治（東京女子医科大学先端生命医科学研究所 特任准教授）

協働実施者：宿野部 武志（一般社団法人ピーベック 代表理事）

実施期間：2021年（令和3年）年10月～2024年（令和6）年3月 ※期間延長

総合評価

一定の成果が得られたと評価する。

本プロジェクトは、メタバースを含めた情報通信技術（ICT）により医療の場でのピアサポートをDX化することで、ピアサポートを享受できる患者を増やすとともに、患者の音声、表情、会話からAIを用いてピアサポートの効果を定量評価することで、正当な対価が得られ、持続可能に運用できるシナリオの策定を目指すものである。

当事者とともに取り組むことのハードルに真摯に向き合うプロジェクトであり、当事者が主体的に参加していること、多様なステークホルダーと協働してトライアルを重ねたことを評価する。一方で、パッケージ化やユニット化といった多地域展開に向けた準備は未了であり、終了後に於いても、正当な対価支払制度の設計に結び付く医療経済への定量的な貢献に向けた活動が進むことを期待する。

項目評価

1. 目標の妥当性

目標は妥当であったと評価する。

当事者を含む多様なステークホルダーが参画し、科学的知見に基づきながらピアサポートのDX化等の手法開発・実装を試みるものであり、ニーズの具体性・手法の合理性ともに高く目標設定は妥当であったと評価する。一方で、学習用データの内容が学習可能性の観点と個人情報保護の観点から縮小され、そのことが定量的評価の困難さに繋がった。ピアサポートの効果測定についてはAIの利用検討に加え、既存の心理的指標なども想定した方が効果検証を早期に明確化し、その後の展開に注力できた可能性が考えられる。

2. 研究開発プロジェクトの目標の達成状況および研究開発成果

プロジェクトの目標は限定的に達成されたと評価する。

帯広、世田谷、福岡での実施は一定程度の進捗があり、ピアサポートを享受できる患者や支援者が増えたこと、その導入による当事者団体の収益増加見込みの定量化など一定の結

果が得られた。一方で、ピアサポート効果の定量評価や、DX化されたピアサポートの持続可能な運用については、開発途上にあると見受けられる。当事者参画医療社会モデルに関する調査は進んだ一方でプログラムの構築には至っておらず、今後の更なる進展を期待する。

3. 研究開発プロジェクトの運営・活動状況

プロジェクトの運営・活動状況は、妥当だったと評価する。

複数の研究グループからなるプロジェクトチーム内での意見共有や連携がなされており、当事者団体、医療従事者、研究者、企業、教育機関、行政等といった立場の異なるステークホルダーと良好な関係性を構築したことを評価する。一方で、AIを用いた評価技術の開発については動きが見えにくく、成果も不十分であったように見受けられる。当事者が主体的に参画することで、それがエンパワーメントや体制構築につながることを期待する。

4. プロジェクト終了後の事業構想(研究開発成果の活用・展開の可能性)

プロジェクト終了後の事業構想は、概ね描けていると評価する。

事業構想において、点在するピアサポートコミュニティをつなぎ、地域・自治体を巻き込む「ソーシャルバザール」、ピアサポートの場を作業療法士や理学療法士の学生の前で行い、当事者の気持ち、そして将来のリハビリのDX化を学ぶ「With Us プロジェクト」、当事者同士の声をデジタル化で蓄積し、蓄積された会話の定量化や参加者同士のコミュニケーションを支援する「“こえ”をかちに作るプロジェクト」といった3つのシナリオの関連性が見え、創出されたシナリオの実装と多地域展開が具体的に提示された点を評価する。一方で、本プロジェクトの中核となるメタバースを活用したピアサポートについては、個別実施の準備に時間を要する状況であり、今後、多地域展開に向けたパッケージ化やユニット化といった進展を期待する。またピアサポートにおける実対面コミュニケーションの持つ魅力や課題なども考慮に入れた展開に向け、自治体からのサポートや広報戦略への取り組みも期待する。

5. その他

なし